

# 比較文化雜誌

1988 Vol. 3

東京工業大学比較文化研究会

東京工業大学比較文化研究会

代 表 江 藤 淳

常任委員 川 鳴 至

大久保喬樹

関 口 時 正

薮 勇 造

# マリノフスキーの出発

## 関口時正

マリノフスキーがポーランド人であったということに、果たして何程か意味があるのか——人類学者たちがマリノフスキーを論ずるたび、徐々にこういった良心的な疑問が提出され、ひとつの主題にまでなったところへ、かなり遅滞きながらポーランドからもこれに対応した答案が出され、ほぼ出揃ったと思われるようになったのは、ごく最近のことである。

一九八四年のマリノフスキー生誕百年を記念して、ロンドンとクラクフそれぞれで行なわれた学会は、その意味で好機そのものだった。クラクフの方の学会報告集が刊行されたのは八五年の末で、その少し前の三月には、ポーランド側のこれまでの研究を集成した「プロニスラフ・マリノフスキーの社会人類学」が出た。そして今年になって、いわば英国側の「アーネスト・ゲルナーが「クラクフのゼノン或いはネミの革命

或いはポーランドの復讐——三幕劇」を発表して、この「出揃った」という感を一層強めたのである。

研究者の関心の中心は何と云ってもマリノフスキーの機能主義がどこに理論上、思想上の源泉をもっていたかということ、これを知るために、彼の受けた大学教育、彼の書いた博士論文、初期のポーランド語論文が丁寧に検討された。

その結果判ったのは、というより、それらの結果を見て、私が最も面白いと思うのは、青年期のマリノフスキーが、さまざまな、相互に整合し得ない思想に触れて、その不整合をそのまま引きずりながら最後まで行った、そして猶かつそれが作品の、やや得体の知れない魅力になっているということであるが、そういう見方をする研究者はほとんどいない。一貫性を強弁してほめたたえるか、ちぐはぐさを論じてけなすか

のどちらかであって、何れも「すぐれた社会学者」のイメージに拘泥して生ずる障害なのである。ゲルナーの最近のエッセイは、これを免れているようだが、これもわざわざクラクフまで出掛けていった、成果の一つではないだろうか。

一方、マリノフスキーの伝記的事実については、将来「日記」のポーランド語原文が省略なしで発表され、娘のヘレナ・ウェインが現在編んでいるはずの伝記が刊行されるまでは、迂闊なことは言えないにしても、さしあたりマリノフスキーがどのような所から出発したのかということだけは書いておきたい。

光

マリノフスキーの父ルツィアンは、ポーランド方言学の創始者と呼ばれる人物で、プロニスラフの幼少時代には、クラクフの大学でスラヴ言語学講座を担当する教授であった。父に対する関係については、マリノフスキー自身がエディプス・コンプレックスの典型であったと言っていたようであり、ヘレナもまた、祖母の話は絶えず聞かされていた一方で、祖父について父が何か語るのを聞いた覚えがないと書いている。弟子のオードリー・リチャーズに向かってoften and vehemently disparaged Lucian というのであるから、それはかなりの程度の反感であったに違いない(註1)。

眼帯までかけて、横たわっていることが多かったというが、そんなものだろうか(註4)。本当にそうであったのならば、眼帯をして、遠い熱帯の国への旅を夢想するマリノフスキーの、クラクフの部屋というのは、きちんと想像するに充分値する、実にスリリングな情景ではないだろうか。そして彼の母は、その旅をも実行に移すのである。右に引用したZ・クシジャンノフスカの回想によれば、こうであった。

……マリノフスカ夫人が、息子のリュックサククに荷物を詰め始めたというので、周囲は大騒ぎでした——リュックサククというところがセンセーションだったのです、當時は旅行にはトランクというのが普通でしたから——そして息子と二人、エジプトへ出掛けていきました(註5)。

一八九九年、マリノフスキーと母は、およそ半年間をエジプトで過ごす。この「療養」で、眼の状態はかなり良くなったらしいが、G・クビーツァによれば、大学に入る前にもう一度、アフリカへ同様の旅をしている(註6)。他方、後の博士論文プロモーションに関する、オーストリアハンガリー皇帝宛ての願書では、ギムナジウムの間眼の手術をしたと自筆の記述が見えるが、これも詳しくいつだったのかは判

そのルツィアンは一八九八年、五八歳で死んでいる。心臓発作ということになっているが、プロニスラフもまた五八歳で心臓発作を起こして死ぬ。しかし、より気味が悪いのは、この年、父が死んでから、悪性の眼病にかかったことで、当時名の知られたヤギエウォ大学眼科教授B・ヴィヘルキエーヴィッチは、これは父方からの遺伝による問題で、失明の恐れもあるという診断を下したうえ、なるべく暗い所において眼を使わないということと、暖かい国への転地療養ということを勧めた。それは療養すなわちリンパ節結核だったろうという(註2)。

当時一四歳、ギムナジウムに前年入ったばかりのマリノフスキーは、結果として通学をあきらめ、卒業するまで在宅生externistとして終始することになる。同時に、それまで父親が寮長を兼任していた、小市場八番地の宿舎を出なければならず、以後はクラクフ市内を転々と移り住むかたちとなった。が、母ユゼファは気丈な人であった。

母親は自ら勉強に取り組みました。ラテン語も、数学も、およそすべての教科をまず自分で頭にいれ、それから暗闇の中で息子に講述するのです。プロニスラフは極めてのみこみよく、一人でも暗い部屋の中で難しい数学の問題を解いていました(註3)。

らない(註7)。何れにしても一九〇二年五月三〇日の高等学校卒業試験に至るまで、在宅生であり続けたことは確かである。

大学に入ってから、母子は毎年のように旅を続けた。北はフィンランドから南はカナリア諸島まで、——北イタリア、ダルマチア、マルタ島、シチリア島、小アジア、北アフリカ、マデira島など、とりわけ地中海を中心とする各地方へ、依然として医者命でいいながらも、驚くほど精神的に出掛けている。世紀末というのは、ヨーロッパの上でも最も移動の自由の大きかった時代であるが、それにしてもこの旅の頻度と範囲は普通ではないだろう。マリノフスキーは後年どこかで「一六歳ぐらいの頃から、私はポーランドを離れはじめていた」と書いている(註8)。この、ただでさえ空気の重い、中世以来煤のつもりにもつた街の暗室から、明るく暖かい南の国へ旅するというのであれば、若いマリノフスキーでなくとも、誰にとっても劇的な体験であっただろう。後にマリノフスキーは、自分が人類学を志すようになったきっかけは、大学三年の頃「金枝篇」に出会ったことだと言っており、これは誰もが引用するエピソードになってしまったが、たとえもしフレイザーに出会わなくとも、というより人類学者にならなかつたとしても、やがては何らかの私たちで南をめざして出発していたに違いない、そう思わせる

に十分なほど、青年期のマリノフスキーにはこの方角のヴェクトルが感じられる。

マリノフスキーはヤギェウォ大学に一九〇二年秋から一九〇六年春まで学び、その七月には既に博士論文を提出して、そして秋、試験を通り、冬にはカナリア諸島へ行つてかなり長く滞在することになる。半年以上行つていたのでないだろうか。(カナリア諸島の気候風土はぜひぶん気に入つたらしく、後の一九二〇年にも、今度は妻とともに行つて、一年滞在する。まさに「コンテネリフで、プロニスラフは『西太平洋の遠洋航海者』を書き、妻エルシーはそれを手伝いながら、自分もコンラッド風の短編小説執筆にいそしんだのである)。

博士号の授与式は一九〇八年の一〇月七日に行なわれ、その直後には、マリノフスキーはライプツィヒ大学に学生登録をしている。そして以後三学期間ヴィルヘルム・ウントの民族心理学やカール・ビュッヒャーの経済学の講義に出たり、音楽会に行つたり、英国、ポーランドの人類学雑誌など——*Man, Folk-Love, Land*——に書評を書いたり(註9)して過す。したがって執筆活動のうえでは、このライプツィヒ時代に人類学への本格的転換があつたことになるが、ここではいま一人の重要人物が登場する。

それは、ライプツィヒにピアノの勉強で来ていた、南アフリカ出身のアンニー・ブラントン (Mrs. Annie Brunton) という女性で、かなりの年上であつたらしいが、意気投合して一緒にドイツ国内やスイスを旅行している。マリノフスキーは、もともと音楽好きではあつたが、この時期音楽学的な勉強もしているのは、この女性の影響かもしれない。そればかりでなくマリノフスキーは、一九一〇年にロンドンに移つてピアノの修行を続けることになつたアンニーの跡を追うように、自分も英国へ渡るのである。

もしブラントン夫人に出会わなかつたら、僕は社会学など始めなかつたらうし、また多少なりとも今のようになつて、イングリサイズされることもなかつたらう、という気がします(註10)。

これは英国へ来て数年後に、ポーランド人の友人アニエラ・ザグルスカへの手紙で書いている言葉だが、もちろん後世の我々には、この種の告白は割り引いて受け取る自由はあるので——これが冗談だったかどうかはさておき、B夫人に会わなくても、その時はその時でまたC夫人にめぐりあう可能性はある——割り引いて考えたとしても、英国へ渡つて人類学でもやってみようという気持ちに大いにはずみをつけたということぐらいは言い得るだろう。のみならず、今のこ

は、「それに一年でもいいから、どうしてもイギリスに行きたいと思つています。やはり現在一番文化水準の高い国だといふ気がするのです。」(註11)と、既に何度か応募しているガリツィア自治政府の奨学金が下りるよう、パヴリツキの応援を請うていて、実際これを獲得し、以後四年間ほど継続して支給を受ける。そして一九一〇年秋、ロンドン大学経済学院で社会人類学の研究を始めるのである。猶、K・J・プロジは、この時点までに、マリノフスキーはウィーンでエールンスト・マッハに会い、パリでデュルケームの社会学理論に接したと書いているが、そう考えられる明白な根拠が示されているわけではない(註12)。

#### クラクフーザコパネ

一九世紀末のクラクフでは、他のポーランドの都市と比べて、政治上、学問上、表現上の自由がよく確保されていた。多くの学者、芸術家がこの町に集まつてきていたのも、そのためであつた。自由の一例を挙げるならば、スタニスワフ・ヴィスビヤインスキ Stanisław Wyspiański (1869-1907) の戯曲、「ヴァルシャヴィアンカ」(一八九八初演)、「レヴェル」(二八九九初演)、「十一月の夜」(一九〇二年一部発表)などは一八三〇年のワルシャワ蜂起を扱つたものであつて、ロシア領であれば、印刷はおろか上演など出来ない相談であつたに

と、彼等がライプツィヒでどんな会話を交わしていたか、知るよすがもないが、ポーア戦争をきっかけとして、南アフリカの問題について、植民地主義一般について、かなり意識の高まつていた当時のヨーロッパの知識人として、当然話題もそれらをめぐつたに違ひなく、このこともまたマリノフスキーの「出発」を促す一刺激となつたであろうことは充分想像される。

ところで先の手紙の受取人 Aniela Zagorska (1890-1943) というのも、別の意味で興味深い人物であつた。ザグルスキ一家というのは、コンラッドが親しくしていた従兄弟たちであり、その内のアニエラは姪の子にあつた。アニエラは長じて英文学者となり、ポーランドにおける、最も優れたコンラッドの翻訳者として知られることになるのであるが、それがどのようにしてマリノフスキーと知合い、彼の英語の家庭教師までやることになつたかは判らない。彼女はコンラッドとの親交もあるので、現在継続刊行中のコンラッド全書簡集が全て出て、マリノフスキーの書簡集でもまた出されれば、マリノフスキーのコンラッド意識という、少しづつながら我々にも判りかけてきている、案外大事な問題にも、このアニエラを通じて、もっと光があたるかもしれないのである。

一九一〇年の夏学期には、マリノフスキーはもう休学している。これより先一月五日付けパヴリツキ神父宛ての手紙で

違いないし、傑作「婚礼」(一九〇一初演。S. A. ワイダ、婚礼)は、クラクフ自体が舞台であった。これに関してミウオシユは「検閲による多少の剪定は大した損害にはならなかった。(役者が、禁じられた台詞を言っている間は、検閲官は氣を利かせて席を外すほど、クラクフはのどかな町だった。)」と書いている(註13)。

そもそもガリツィア(「ガリツィア―ロドメリア王国、及びクラクフ大公国、オシフィエンチム公国、ザトル公国」の通称、一七七二―一九一八オーストリア―ハンガリー帝国領)自体が、一八六七年以降、すなわち「二重君主制」下にあつて、かなり広範な自治権を得ていた。世紀中頃のガリツィア総督アゲノール・ゴウホフスキ伯爵(1835-1895)が、ポーランド語の使用を推進し、オーストリア政府の内務大臣となつて、ガリツィア自治権を獲得したあたりからは、ハプスブルク帝国においてポーランド人政治家達の影響力が、これまでになく増大し、マリノフスキーの小学校時代には、ウィーン政府の内閣は、首相のカジミエシユ・パデニ伯(1846-1921)を始め、内務、外務(A・ゴウホフスキ二世)、大蔵、ガリツィア担当と、要職をポーランド人が占めるに至つていた。

これに加えて、クラクフはかつての首都(一〇三七―一六一一)として、或いはウィーン会議によつて保障された「自由都市」(一八四六)として、独特な、(主に精神的な)特権

一方であるとするれば、他方にとつての価値は詩であり、象徴であり、個人であり、内省であり、実存であり、審美主義であり、形而上学であり、ワルシャワが、常に戦う町であつたとすれば、クラクフは考える町であつた。

モダニズム、「若きポーランド」、新浪漫主義、新芸術、印象派、アカダンティズム、象徴主義など、世紀末から世紀初頭にかけてのポーランドの文学思潮は、さまざまな名で呼ばれてきたが、このことは、それが当初からはつきりとした綱領を掲げて始められた運動などではなかつた、という事情を示すとともに、技法はともかく、内容にはほとんど統一的なものを見いだせないということに関係していた。綱領らしきものといえば、「綱領などというものは、活動したい人間が作ればよい。我々には全くそんな意図がない。むしろまさに我々は活動しないために書いているのである。」「文学の最も新しい世代の特徴は、個人主義と哲学的内省である。一方、現実からの、行為の思想、協力の思想からの、ある種の撤退を促すことになつた過程がどういふものであつたか、ということについては、我々はここで分析するつもりはない。」というアルトゥール・グルスキ(1870-1957)の言葉がむしろそれに該当する(註15)。

一八九七年、マリノフスキーがギムナジウムに入学した頃、ウィーン帰りのルドヴィク・シュチェパインスキによつ

て維持していたことも事実である。なかでも、一時期を除き、講義は常にポーランド語で行なつてきた、ヤギェウォ大学をはじめとするクラクフの高等教育機関は、ガリツィアの首都ルヴフの大学と並んで、世紀末当時、ポーランド語で学問のできる唯一の場所であつたし、また本来が、その大学と教会を取つてしまえば何も残らないような、小さな(一九〇〇年当時人口八万五千)、「文化」専門の町なのであつた。

そうした自治にもとづく政治的自由に支えられながら、クラクフは、カジミエシユ大王(Kazimierz Wielki, 1310-70)(註14)以来の文化伝統とユダヤ文化の伝統とをともに引き継ぐ、自らの文明の爛熟と同時に、ハプスブルク帝国のその爛熟期をも経験しつゝあつたといふべきで、ポーランド文化史にいう反実証主義、新浪漫主義、あるいは美術史上のゼツェスイオンなどの最も強力な基地となつたのも当然なことであつた。そういう意味でなら、クラクフは多くの点でワルシヤワよりウィーンに近かつた。

ワルシヤワ一月蜂起挫折後の文学の実証主義運動(二八六四―一九一四)はほとんどワルシヤワを中心に、それに対する反実証主義的なモダニズム(二八八八―一九一八)がクラクフを中心に展開したのも、興味深い事実ではないだろうか。そこには二つの町の空氣の違いもよく出ているのである。散文、写実、社会、啓蒙、進歩、功利主義、実学尊重が

て、「生」Zycie(1897-1900)という小雑誌が発刊され、短命ではあつたがモダニズムの機関誌ともいふべき、重要な役割を果たした。当初からの協力者グルスキが、「若きポーランド」と題する一連のエッセイを発表して、先のような宣言を行なつたのはその誌上だつたし(文学運動の呼称としての *Moda Polska* もこれに由来する)、翌秋にはベルリン帰りのスタニスワフ・プシビシエフスキ Stanislaw Przybyszewski(1868-1927)が編集長となつて、しばらくの間熱狂的芸術至上主義あるいは「魂」主義とでもいふべき主張をぶち上げた。が、それ以上に、そうした宣言とは別段関係なく、カスプロウイツチやヴィスビヤインスキが作品を発表したということの方が、実質的には重要と言へるかもしれない。

「生」が彗星のように消えてしまつた後には、早くからメーテルリンクやランボー、フランス象徴派を積極的に紹介したり、半世紀前の浪漫派詩人ノルヴィットを再発見した功績のある、ミリアム Miriam: Zenon Przesmycki(1861-1944)の手によつて、はるかに贅沢な雑誌「ヒメラ」Chimera(1901)がワルシヤワで刊行され、ベレント、カスプロリウイチ、レシミヤン、ミチンスキ、プシビシエフスキ、ヴィスビヤインスキ、ジェロムスキ、ポレンポーウィッチ(翻訳)など、いわばこの時代の星たちが総出で書いた。

何れにしても、マリノフスキーの大学生時代は、モダニズ

ムの頂上期と完全に一致しているということが、ここでは大事なのであるけれども、関連して二つ気が付いたことを記しておくすると、これらモダニズムの文学者と一括りにいつても、ガリツィア派は案の定詩人が多いということ——ウィスピーヤンスキの戯曲は詩劇である——と、その中でもドイツの大学で哲学の講義を聞き、ザコパネ及びクラクフに好んで住むという一見無関係のように見える、二つの事柄を含んだ経歴の持主が多いということである。テトマイエル（ハイデルベルク）、カスプロウヴィッチ（ライプツィヒ）、ミチンスキ（ライプツィヒ、ベルリン）、ジュワフスキ（ベルン）などが、両方の条件を充たした好例だが、一方だけの作家ならもつと多い。

マリノフスキーもよく滞在し、ニュー・ギニアの日記でも懐かしがって何度も触れている、ザコパネという村は、ポーランドの上高地、ないしは飛驒高山のような場所であるが、一体に、このクラクフの南方、スロヴァキアとの国境をなす高山地帯 Tatry が、世紀末になって初めて、しかも驚くべき勢いで、知識人の関心を惹くようになったのも面白い現象である。そのことと哲学の流行は、おそらく結び付いているはずなのだが、ここでは深入りせず、現地人ヴィトキエーヴィッチが書いているものを少し引用しておくだけにしよう。

このタイプの人間にとつては、ザコパネは、天国そのもの、恐るべきオランジュリーであつて、彼等はそこで、内部から、或いは時には表面からも、急速に腐蝕しながら、奇怪な植物の如くに繁茂しているのである。このプロセスは、その個体を別の環境、すなわちポーランドの辺鄙な村とか、アメリカとか、オーストラリアへ移すことによつて、食い止めることは出来る。が、それも長くは持たない。麻薬は、依然として、いわゆる禁断症状の形で作用し続け、遅かれ早かれ、その人物は、中毒の抗いがたい力に引かれて、自滅という、不可避のプロセスを完了するためにも、戻つて来ざるを得ないのである（註16）。

これは一九一九年、雑誌「タトリのこだま」に掲載された「ザコパネのデモニズム」という文章の一部分であるが、引用した最初の辺りは、マリノフスキーがオーストラリアへ渡つて、戻つて来ず、ヴィトキエーヴィッチ自身は二〇年後に自殺することになることを考えると、何とも皮肉な、そして半分はきわめて正確な診断であつたと言つていい。

松と白樺の林に覆われた丘々の中に潜む、メランコリックなりトワニアの湖も、熱帯インドの原生林も、オーストラリアの煉瓦のように赤い砂漠も、熱帯の熱を裡に秘めた

弱者にとつては、ザコパネは、真に悪魔的な女との出会いと殆ど同様に（勿論それなりに長い時間つきあえばということだが）致死的である。が、本当の精神の巨人にとつては（そもそもそんなものが存在するとしてだが）、ザコパネは、彼等の本質が凝集し、新たな地平が開け行く、そして芸術的、社会的、或いは学問的な創造が、新形式を生み、新しき価値をうちたてる場所なのである。（…）ザコパネの空気の中には（…）、阿片の煙、大麻のマーマレードの百倍も悪質な、微妙なる麻薬がたちこめていて、これに冒された全ゆる分野の作家たちが、その作品が周囲に脈打つ現実との繋がりを失い、ますますつまらなくなり、せいぜい精神病理学者か、さもなければ倒錯であれば何でもわざわざ身を委ねるといった類の人間の興味しか惹かないような代物になり果ててゆくことには、一向頓着なく、全くのオンファロプシヒズムすなわち自らの形而上学的臍のとりとめなき観照に耽つている。実際、自分の持つ最も本質的な価値を、意図的に破壊することによつて、最も完全に、最も確実に自己が生きられる、というタイプの人間がいるのである。（…）ところが、少なくとも我が国では、この種の人間にこそ、芸術の領域では、或いは、形式論理学ばかりを当て嵌める訳にはゆかないような、思想の領域で、しばしば真に創造的な人物が現われるのは確かであ

ザコパネの冬、どうしようもない絶望的な悲しみの中で全てが生れる代りに死んでゆく春、緑青色の湖に姿を映す花崗岩の山々の巨像に囲まれた夏、ザコパネの全自然が奇蹟的な色彩を生み出しながら破壊と腐敗の中に本然開花するかと思われる秋、それらの思い出を打ち消すことは出来ない（註17）。

これも、オーストラリアでマリノフスキーと喧嘩別れをし、戻つてきたヴィトキエーヴィッチの率直な気持ちであろう。

ところで、「明らかな誤訳が色々あるとしても、この日記の中には、マリノフスキーの気分、欲求不満、昂揚、感想、思索の、実に鮮烈な記述がある。クラクフ、ザコパネの「若きポーランド」の空気の中に育つたということが、ここにはつきりとその刻印を残しているのである」というようなパルツフの言が良い例だが（註18）、マリノフスキーが、人格形成期をこのような雰囲気の中を過ごし、フフィステック Leon Chwistek (1884-1944)（註19）やヴィトキエーヴィッチらを始めとする、多くの文学者や芸術家とともに、創作ごっこをしながら過ごしたということを、人々が思い出したのは、何より、一九六七年に日記の一部が英訳されてからのことであつた。たしかにこれが世紀末のモダニズムの文学者か、画家の

日記であれば、何の不思議も違和感もないはずなのであった。実際、「日記」は、文学青年としてのマリノフスキーの素顔を端的に露出している。だが彼の「文学性」はそれにとどまらない。

## 表現

マリノフスキー以前の人類学調査は、アンケートを遠隔制御するものであったり、現地にあつても通訳に頼ったり、複数の学者が複数の文化を含む広い地域を巡回するものであったりした。彼はそれらを排して、一人で長期間、現地社会のなかで暮らし、その言葉を習得することによって研究するという方法、人類学者のいわゆる participant observation の元祖となったのだが、これは言ってみれば、「文学」の基本的な方法ではないだろうか。

人間の活動に参加し、同時にこれを観察するという、根本には矛盾を含む、一種の不可能事を敢えて企てる、何とも文学的な態度ではないだろうか。無論、「同時に」が真に不可能である以上、表現者は involvement と detachment を繰り返す。事件を生きたことと事件を認識することの間を往復する。しかし、一般に芸術の世界では、方法は表現の成就を保障出来ないものであつて、我々は「不可能」の意識を簡単には捨てきれない。社会科学者の場合、この意識の強弱は実に人

さまざまで、勿論自分が文学をやっているなどと思つてゐる者は少ない。西太平洋の遠洋航海者のマリノフスキーなどは、「作品」が成功したからこそ、むしろ嬉々として、教師或いは巨匠のように、制作方法の解説をしているのである。

マリノフスキーは、「現実生活の測り知れぬ、諸々の事柄」imponderabilia of actual life を観察し、記録しなければならぬという(註20)。原住民自身が言葉で言い表わせないような心理的状态は、人類学者が、彼等の行動や思考を常日頃詳細に観察し、その様式を発見することによって、記録しなければならぬという。しかも「その結果を最も説得力ある仕方です式化せよ」という(註21)。また、言語についても、社会的対象についても、その「状況的文脈」を強調する。文脈を離れて、意味はないという(註22)。これらは正に小説家のABCである。

タルコット・パーソンズは、マリノフスキーが、一般的理論の構築には向かなかつたとしても、個人の心理的動機の洞察に長け、「臨床的」理論と「分析的描写」に優れていたとした。また、トロブリアンド人の行動の合理的と見える面も非合理と思われる面も、それらとともに「近代ヨーロッパ人が人間的に理解できるように」説明することをめざして、い

わゆる機能主義もそのために担ぎ出された、という意味合いのことを書いてある(註23)。これはその通りに違いない。未開人の、一見支離滅裂な行動、思考が、支離滅裂でない、未開人を見たこともないヨーロッパ人が、「人間的に humanly」解るように、というのであれば、解らせる方便は、映画の発達していなかつた当時では、オペラと小説と機能主義くらいしかなかつた。

こうした諸点を通じてマリノフスキーが傾注した努力は、単にトロブリアンド社会の現実の再現或いは翻訳に止まらず、そこに「参加」し「観察」する自分をも対象化して描き、織り込むことによつて、自らの置かれた状況の説明なし正当化(勿論ヨーロッパ人を相手としての)という意味での、自己表現としても結晶した。彼のモノグラフに現われる、語り手としての「私」の存在が極めて重要であるということは既に書いたことがある(註24)。

また、見逃せないのは青年期のマリノフスキーに一貫する、次のような態度である。

(1)人間には、自己保存に向かう性向がある。オルガニズムのあらゆる機能、従つて思考も、追想も、創造もまた、個体を環境のうちに最も有利に置くべく、働くのである。そして我々の精神は、これを補充するに、現実の可能な限

り精確な反映を以て、事実への想像力の適応を以てする。

(…) 学問の拠つて立つ基礎はこれである(註25)。

(2)博士論文のなかで、マリノフスキーは言う——学問的認識は、厳密な意味で実践的生命活動であつて、その役目は「個人を環境に対して最も有利な位置に置くこと」である、と。そうであれば、学問は人間の欲求を充足するための手段ということになる(註26)。

(3)——いいかい、人生は、僕等が自己という素材から創造する、傑作、じゃなければ茶番劇なんだ(…) 芸術は、君の場合、そのための、主要な手段に過ぎないということ、分かるかい、(…) 唯一本質的なのは、生、それ自体なんだよ。

ブングは(…) 生命力を獲得する手段としての芸術という考えは、彼にとつて殆ど唾棄すべきものであるにも拘らず、公爵の言葉が、彼自身が日頃見失いがちだった、生の形而上学的不思議さについての感覚を、再び彼の内に目覚めさせるのを感じていた(…) (註27)。

(4) 思考が生から衝動を受けるのであつて、生が思考か

ら力を得るのではない」言い換えれば、思念は流れの目印となる、漂う浮きかブイのようなもので、流れを導くのは思念じゃない、その逆だ。

所有の感覚。この僕が彼等を記述する。或いは創造する。

認識の喜び。この島は、僕が「発見」した訳ではない。でも今初めて芸術的に体験され、知的に会得されたのだ(註28)。

(1)はマッハとアヴェナリウスを論じた博士論文から、(2)はそれに言及したA・フリスの論文から、(3)はワイトキエーウィッチの「ブンゴの622の墮落」(一九一〇年)からそれぞれ引いたもので、ブンゴはワイトキエーウィッチ自身、公爵がマリノフスキーである。(4)は「日記」である。

芸術至上主義のワイトキエーウィッチと違って、病弱でもあったマリノフスキーが、「生の創造」に固執したことは分かりやすい。そして認識活動を生物の生理学的欲求の充足作用と考えるマッハに共鳴して、学問も芸術も生きる手段の一つであるとみなし、後には宗教にも、文化という装置自体にも、そうした機能を見るようになるのだが、トロブリアンド

理論の復権を待望する学者も多い。第一次大戦前の理論が形而上学に偏っていたとすれば、マリノフスキーの民族誌は文学に墮してしまっただけかと思えるだろう。「科学」であることの困難、自然科学へのコンプレックスは、人類学が、形而上学と文学のどちらの極へ振れても、理論の实地検証、具体からの一般法則の抽出、というそれぞれのかたちの注文中で悩ませる。

### 思想

ところで、マリノフスキーの思想はどこに源泉を持つのかという問題に対して、どういう解答が出されたか。まとめてみると、こうなる。

認識と学問の「instrumental」な性格付け、学問の主な研究対象は事象の関数(funkcja)関係であること、法則は实地検証されねばならないことなどは、エルンスト・マッハらの経験批判論及び自然科学の影響である(パルッフ、フリスら)。ただし、極端な経験批判論に対しては、予断の全く入らぬ、純粹事実の観察というものはあり得ないとして、修正しており、これは、F・A・ランゲらの新カント派の影響である(プロジ)。文化相対主義、反進化論、コスモポリタニズムはみなモダニズムの産物であって、マリノフスキーは新浪漫主義と第二の実証主義とのアマルガムである(イェルシ

での仕事には、正に彼が彼自身の生を作りゆく手段としての「表現」という性格が、極めて色濃く現われているのである。そこではトロブリアンド人の他に、マリノフスキーという、もう一人の主人公がくつきりと描かれている。そういう意味では、一種の表現論とも言える「participant observation method」のみならず、後年形成される「文化理論」における、その心理主義、生物学主義或いは行動主義的主張の根柢の中にも、自らの異文化体験を、無自覚に、そつとすべり込ませているのではないかとさえ思われる。

さらにはまた、文化が一つの全体であるとするマリノフスキーのholisticな固執も、自分の表現する対象としての文化あるから一個の全体でなければならぬ、という自覚されない契機を含んでいるといえ、言い過ぎだろうか。

マリノフスキーの革命というようなことが言えるのは、それは社会人類学における理論と民族誌の関係が、マリノフスキーによって一変したからである。乱暴で図式的な言い方だが、第一次大戦前の理論と民族誌の(そして理論家と民族誌家の)関係は、主人と召使いのようなものであった、といつて決して誤りではない(註29)。

クーパーだけでなく、こう認めている者は多いだろうが、(ナ)。これに、マリノフスキーの哲学的背景はヘーゲルだろうと書いた、かつてのジャーヴィ(註30)や、英国へ来てからウィリアム・ジェイムズのプラグマティズムに影響されたのだろうと書いたリーチ(註31)などを加えてゆくと、混乱も極まるかのようにだが、幸いこの二つの仮説は、もう考慮する必要はなくなった。

それにしても、マリノフスキーのあるかないかの「思想」の身元を調べる学者たちの論文には、何と夥しい数の主義の名と主義者の名前とが出てくることか。驚くべきは、思想の源泉は、書物と大学の講義の中にしかない、あるいはその中だけを探れば済むと思われていることである。一般論としても、思想が本の中だけで形成されるとも思えないが、ましてマリノフスキーのような人間の場合は、随分と不十分な調査ではないだろうか。勿論完全な調査などあり得ないことは分かり切っていて、ただその不十分という意識の欠如が、不可思議である。

もつとも、マリノフスキー在学時の講義内容とか、博士論文とかを調べても、それらは後年の彼の仕事にとって一切意味を持たないと、言い切る社会学者もいる(註32)。そしてすべてはフィールドで得られたという。たしかに経験主義的なマリノフスキーに見合う以上の断言だが、私はこれを、決定的なものメラネシアで得られた、という程度の表現に言い

換えておきたい。

冒頭に挙げたゲルナーのエッセイには、余韻の大きい面白さがある。手酷く言えば、題名どおりの空想ということになるが、人類学史を広い文脈で考えたい人間には、刺激的である。ポーランドでのマリノフスキー研究を踏まえ、ポーランド自体を主題に組み入れるような論文は、少なくとも英語圏にはなかったから、それだけでも一読には値する。

人類学は、現在を我々の過去の証拠として使おうという試みから生まれた。しかし、先に述べたような理由で、人が同時に *diachronist* (通時主義者、歴史主義者) でもあり、ポーランド人でもあることは難しかった(註33)。

ここでゲルナーは、ヘーゲルのプロイセン中心の歴史発展論と、欧州全般に流行していた進化論とを括って、一九世紀「西欧」の基本的な思想潮流と見、これを承認することは即ちポーランドの存在理由を否認することにつながったはずだと考えている。たしかに、現に国家を失っていたポーランド人にとって、ヘーゲルの決定論的歴史主義は、愉快なものではなかった。実際批判は多かった。また、社会進化論につきまとう、優勝劣敗の概念も、もしかすると受け入れ難かったかもしれない。しかし、だからといってマリノフスキーが、

事には、相当のねじれが内在しているということを、伝えるだけでも貴重な論文である。人類学から見れば、傍観者に近いはずのゲルナーであるが、それだけにこの学問の成立状況に始めから存在した、大きなねじれがよく見え、気になるのかもしれない。そして、実際問題としては、人類学内部におけるマリノフスキーの評価という問題については、もうそろそろ言うべきことも尽きる頃かも知れず、むしろそのねじれを通じて見えてくる、より一般的な問題こそ重要であると言える。——ポーランド、近代ヨーロッパ人の自己発見、進化論、サイエンティズム、自然認識、等々——もとはといえば、やはり傍観者の私の関心の本拠も、そういう所にあるのだった。ゲルナーが、思想の引き継ぎの仕方にねじれを見ているとすれば、私は、表現性のあり方にねじれを見るが、ともにこれを積極的に問題とすることには変わりない。マリノフスキーがポーランド人であったということに、何程の意味があるのかという問に対しては、何よりこのねじれがあったというの、一つの答えである。

或いは、さらに広めに言い換えておこなうならば、マリノフスキーは、ポーランド人であったということよりも、そのポーランドを出たことの方が、意味が大きい。クラクフを出発し、メラネシアに到着したことで、ねじれは一層大きく、強力なものとなったが、そうなれば、それはもうモーメントで

ポーランド人として、意図的にヘーゲル、スペンサー、フレイザーに対する復讐としての機能主義を發明したなどとは言えないし、ゲルナーも無論そうは言っていない。あくまでマリノフスキー革命を、そういうドラマとして読んだら面白いということなのである。

ヨーロッパ思想の、より広い文脈の中でも、マリノフスキーは、風変わりな現象と思えてくる。「いま——ここ」の実証主義的態度(…)としての認識論的マッハ主義と、制度の相互依存性及び機能性の有機的な意味合いとを、融合させた思想家。(…)彼は、浪漫主義の実証主義者にも、全体論者的共時主義者にも同時になれたし、過去という悪魔を追い払うのに実証主義を、現在に、生命ある有機的相互関連性を付与するためにプラグマティズムを使った。こうしてマリノフスキーは、ヨーロッパ人が「悟性」と「共同体」とをめぐって戦わせていた議論のカードを、もう一度切り直してみせたのだった(註34)。

この文章には、こういう論調だけでなく、機能主義的「歴史」解釈には、まだまだ可能性があると示唆する、哲学者らしい、巧妙な議論も含まれているが、詭弁と感ずる読者もいることだろう。それはともかく、マリノフスキーの人物と仕

ある。

最後にいくつか触れておきたいことがある。

一つは、マリノフスキーにとつてのウイトキエウイチということで、ここ一年半ほど調べたり考えたりしたが、結局「一方マリノフスキーは、表面的には、ウイトケウイチからあんまり学んだように見えない」という山口昌男の言葉(註35)を繰り返すほかはない。二人の書いていたものの性質の違いもあるだろうが、たしかに逆の「影響」の方がはるかに大きく見えるのである。

二つ目は、マリノフスキーの表現について、コンラッドも絡めながら書いている、ロバート・ソーンソンの短いエッセイがあるが(註36)、これについては、またしてもきちんとして扱って余裕がなかった。何れ、今度はコンラッドをめぐりながらと考えている。

三つ目は、マリノフスキーと全くの同時代人で、青年期には詩を書き(Cf. "Chędź", 一九〇三年ワルシャワ刊)、後にアメリカへ渡って、アメリカ社会学協会の会長まで務めた社会学者フロリアン・ズナニエツキが、文化を一つの全体として扱う立場に反対し、社会の変化に興味を持ち、個人の生物学的、心理学的過程は一切考察しないという立場を取ったこと

である。そして彼のみならず両大戦間のポーランド社会学界は、全体がマリノフスキーの人類学とは無縁のままに活動していたという点については、イエジー・シャツキが、八四年のクラクフでのマリノフスキー記念学会で、大変手際よい発表をしてくれている(註37)。

最後に、マリノフスキーの文化相対主義と彼の出身の関係であるが、ポーランド人であれば、長く植民地主義に悩まされた者として、文化の平等、民族の自決を信条としやすいだろうという考えがあり得、コンラッドに関連しても、これは考えねばならない問題ではあるが、今のところ私にはこれに与する自信がない。また、モダニストは相対主義者であつたという、イエルシーナの意見も無邪気過ぎる。

ただ、マリノフスキーがアフリカの植民地統治に関して取つていた態度、すなわちヨーロッパは、まだ一人で歩けぬアフリカに対して、平和的に、双方の利益を考えつつ、その発展を助けなければならないという、paternalisticな態度、間接統治、或いは共同統治を提案する態度は、ゲルナーが上述の文章で引いている、オーストリアIIハンガリー帝国に関する、マリノフスキーの極めて印象的な言葉と、事の外、深い所で繋がっている可能性もあるかと思う。

私はここで、凡そ正直で真率なポーランド人であれば、

曾ての「二重君主制」の政治体制について、称賛以外のいかなる態度も示し得なかつた筈だと、明言しておきたいと思う。私見によれば、大戦前のオーストリアの、その連邦制度は、少数民族のあらゆる問題に対する、妥当な解決策であつた。小型版、国際連盟のモデルであつた(註38)。

一九八七・九・三〇

#### 註

- (1) 文献IV・五二九頁。
- (2) 文献I・4「プロニスワフ・マリノフスキ、ポーランドの青春」・八七頁。
- (3) 同。
- (4) 文献IV・五三〇頁。
- (5) 文献I・4・八七頁。
- (6) 同。
- (7) 文献II・12「プロニスワフ・マリノフスキのクラクフ博士論文」・二四九頁。
- (8) 文献IV・五三二頁。
- (9) J.Mathew: *Two Representative Tribes of Queensland*(review): *Man*, 1910, vol.10, pp.139-140  
<Lud. Kostrzyński *Etnograficzny*, vol.XVI, no.1 (review): *Folk-Lore*, 1911, vol.22, pp.382-385.  
*Tolizmizm i egzotyzm*. 第一編 *Lud*, 1911, vol.17, no.2, pp.31-56.
- (10) 文献IV・五三三頁。
- (11) 文献II・13「プロニスワフ・マリノフスキの手紙」・二六三頁。

- (12) 文献V・四五頁。
- (13) Caslaw Mlitosz: *The History of Polish Literature*. 1st ed. New York, London, 1969, p.356.
- (14) ピアスト王朝最後の王。法制、経済、軍備、外交、多くの面で善政し、クラクフのヤギェウオ大学設立(二三三四年)や、ユタヤ人の保護でも知られる名君主。
- (15) Julian Krzyżanowski: *Dzieje literatury polskiej*. wyd. III. PWN, Warszawa, 1979, p.473.
- (16) 文献VII・四九四—四九六頁。
- (17) 同・四九八頁。
- (18) 文献IV・二一〇頁。
- (19) マリノフスキーと同年に生まれ、哲学、数学、美学の多方面にわたって活動した知識人。ルウヴの大学では論理学の教授。自らも絵を描いた。芸術における現実の多様性。(一九一八年)「学問の境界」(一九二五年)
- (20) *Argonauts of the Western Pacific*. London, 1922, pp.18-19.
- (21) 同・二三三頁。
- (22) *Coral Gardens and Thier Magic*. London, 1935, vol.2, p.11.
- (23) Talcott Parsons: *Malinowski and the Theory of Social Systems*. in: *Man and Culture*. ed. Raymond Firth. London, 1957, p.31.
- (24) 関口時正「プロニスワフ・マリノフスキーの日記をめぐる」『西スラヴ学論集』第一号(一九八六年) 東京大学教養学部外国語科英語研究部 七七一—七五五頁。
- (25) 文献II・一・二四頁。
- (26) 同・三一頁。
- (27) 文献VIII・七六一—七七頁。
- (28) 文献IX・二三三頁、一四〇頁、一三三頁。
- (29) Adam Kuper: *The Man in the Study and the Man in the Field*. in: *Archives Européennes de Sociologie*, vol.21, 1980, p.15.

- (30) I.C.Jarvie: *The Revolution in Anthropology*. London, 1964.
- (31) E.R.Leach: *The Epistemological Background to Malinowski's Empiricism*. in: *Man and Culture*. ed. Raymond Firth. London, 1957.
- (32) 文献I・一四三頁。
- (33) 文献III・五四頁。
- (34) 同・七二—七三頁。
- (35) 山口昌男「文化人類学への招待」『岩波新書』二〇四・一九八二年・一四頁。
- (36) Robert J.Thornon: *Malinowski and Imagination*. in: *Anthropology Today*, vol.1, no.5, 1985, pp.7—14.
- (37) 文献I・3「マリノフスキーとポーランド社会学の展開」
- (38) 文献III・五八頁。

#### 参考文献

1. *Między Dwoma Światami*: Bronisław Malinowski. *Zeszyty Naukowe Uniwersytetu Jagiellońskiego* DCLXXIII. Prace Sociologiczne Zeszyt 10. red. Grażyna Kubica. Janusz Mucha PWN, Warszawa-Kraków, 1985.
- Referaty:
  - 1.Raymond FIRTH: Malinowski w historii antropologii społecznej.
  - 2.Piotr SZTOMPKA: O Malinowskiego do Mertonu. Studium o dziejach i znaczeniu idei.
  - 3.Jerzy SZACKI: Malinowski i rozwój polskiej socjologii.
  - 4.Grażyna KUBICA: Polaka Młodociej Bronisława Malinowskiego.
  - 5.Andrzej K. PALUCH: Bronisława Malinowskiego rozumienie kultury.
  - 6.Andrzej FLIS: Filozofia krakowska początku XX wieku i kształtowanie się poglądów naukowych Malinowskiego.

7. Jan JERSCHINA: Modernizm a osobowość Bronisława Malinowskiego.
8. Janusz MUCHA: Malinowski a problemy współczesnej mu cywilizacji.
- II. *Antropologia Społeczna Bronisława Malinowskiego*.  
red. Mariola Flis, Andrzej Paluch  
PWN, Warszawa, 1985.
- Artykuły:
1. Andrzej FLIS: Filozofia krakowska początku XX wieku i kształtowanie się poglądów naukowych Malinowskiego.
2. Zdzisław MACH: Metoda intensywnych badań terenowych w historii antropologii społecznej.
3. Mariola FLIS: Malinowski a Radcliffe-Brown: dwie wersje funkcjonalizmu.
4. Konstanty SYMONOLEWICZ-SYMMONS: Osobowość twórcza Bronisława Malinowskiego.
5. Frances PINIE: Funkcjonalizm Malinowskiego w tradycji brytyjskiej antropologii społecznej.
6. Andrzej K. PALUCH: Bronisława Malinowskiego rozumienie kultury.
7. Jan KUBIK: O pojęciu funkcji w antropologii Malinowskiego.
8. Marian KEMPNY: Koncepcja potrzeb w funkcjonalizmie Malinowskiego.
9. Jerzy SZYMURA: Bronisława Malinowskiego "etnograficzna teoria języka".
10. Janusz MUCHA: Antropologia stosowana w ujęciu Bronisława Malinowskiego.
11. Bronisław ŚREDNIAWA: Studia uniwersyteckie Bronisława Malinowskiego.
12. Andrzej FLIS: Krakowski doktorat Bronisława Malinowskiego.
13. Grażyna KUBICA-KLYSZCZ: Lsty Bronisława Malinowskiego.
- III. Ernest GELNER: Zeno of Cracow or Revolution at Nemi or The Polish revenge - A Drama in Three Acts. in: *Culture, Identity, and Politics*. Cambridge University Press, 1987, p.47.
- IV. Helena WAYNEMALINOWSKA: Bronisław Malinowski: the influence of various women on his life and works. in: *American Ethnologist*. vol.12, 1985, p.529.
- V. Krzysztof Jarosław BROZI: *Antropologia funkcjonalna Bronisława Malinowskiego*. Wydawnictwo Lubelskie, Lublin, 1983.
- VI. Andrzej K. PALUCH: *Malinowski*. Wiedza Powszechna, Warszawa, 1983.
- VII. Stanisław Ignacy WITKIEWICZ: Demonizm Zakopanego. in: *Bez kompromisu*. PIW, Warszawa, 1976, p.494.
- VIII. Stanisław Ignacy WITKIEWICZ: *622 upadki Bonga czyli domonieczna kobieta*. PIW, Warszawa, 1974.
- IX. *A Diary in the Strict Sense of the Term*. Harcourt, Brace & World, Inc. New York, 1967.